

櫻井会長挨拶（退任御礼）

発言の機会を頂戴しましたので、退任にあたってのご挨拶を申し述べさせていただきます。

2年前の臨時総会において、全国会長という大役を仰せつかり、所信表明を行った時の緊張感が、まるで昨日のここのように思い起こされます。

席上、私は、東日本大震災の被災町村の議長として、現場の声を政府・国会に直接届け、東京オリンピックが開催される2020年までに、復興の総仕上げに向けた事業を着実に推進することをお約束いたしました。が、インフラや街並み等の復旧は概ね完了し、相応の成果が上がっているものと感じております。

その一方で、原子力発電所事故からの「福島の再生」さらには、被災者の「心の復興」にはまだ

まだ時間が必要です。

加えて、熊本地震や北海道胆振東部地震、近年多発している豪雨災害の被災地でも懸命な復興事業が行われておりますので、次期執行部の皆様におかれましても、被災町村に寄り添って復興の後押しを続けていただきますよう、お願いいたします。

「地方創生」の取組みも大きな転換期を迎えております。

本年度は、第1期のまち・ひと・しごと創生総合戦略の最終年の総仕上げと第2期総合戦略の策定の時期にあたる、大変重要な年です。

第1期総合戦略においては、議会と執行部が車の両輪となって、総合戦略の策定や検証を行って参りましたが、私は、地域社会の存亡に関わる問題を執行部と議会の「2つの車輪」だけで進めて

いくことは心許ないと考えております。

第2期総合戦略の策定にあたっては、行政と議会に住民や地元企業を加えた幅広い視点、言うならば「4輪駆動」の体制で、町村の将来像を作り上げていく必要があると存じますので、全国町村議会議長会からもそのような仕組みづくりを提唱されることを切に望みます。

さらには、「町村議会・町村議員のあり方」も、各方面から注目を集めました。

議員のなり手不足問題に端を発した高知県大川村における「町村総会」の検討や、北海道浦幌町議会における「議員のなり手不足検証報告書」の策定など、個々の町村では議員のなり手不足を地域存亡の危機と捉え、自らの力で克服しようと懸命な努力を続けています。

しかしながら、この問題の根底には、低額な議

員報酬をはじめ立候補を躊躇せざるを得ない問題が山積しており、多様な人材を町村議員として確保するための環境整備が急がれております。

私も、各種政策会議や地方制度調査会において、事あるごとに訴えて参りましたが、これを実現するためには、継続的に声を上げつづけることが必要不可欠でありますので、今後も粘り強く運動を展開されることを期待いたします。

さて、私は、16年前の議員初当選以来「110センチの目線の高さの政治」を政治理念に掲げて活動して参りました。

「110センチ」とは、小学生低学年の子供、杖を必要とされるお年寄り、更には車椅子に乗られている障がい者の方の目線の高さであります。

上皇陛下は、東日本大震災をはじめ、全国の被災地を訪問された際、避難所において、正座をさ

れ、被災者と同じ目線の高さで慰めのお言葉をかけてこられました。また、上皇后陛下は、こども達に対し、ご自身の膝が地面につくまで腰を落とされ、同じ目線の高さでお話をなさっていました。

政治家は、慣れてくるとどうしても上から目線が多くなります。しかし、上から目線では、そこに対話は生まれません。どうか皆様方におかれましては、町村住民の方々に対して、同じ目線の高さで対話をし、活動されていくことをお願い申し上げます。

全国町村議会議長会におかれましては、これからも子供やお年寄り、障がい者の皆様、さらには社会的弱者といわれる方々の気持ちに寄り添い、幅広く民意を吸収できる慈愛に満ちた組織であり続けていただきたいと存じます。

翻って、松尾新会長におかれては、町村議会の代表として、政府・政党・国会といった国を動か

す大きな力を相手に、意見を述べていただくこと
となりますが、私自身もこの2年間大切に参
りました「引かぬ、媚びぬ、顧みぬ。」の精神で、
全国町村議会議長会のアイデンティティを貫き通
していただきたいと存じます。

最後になりましたが、在任中は、都道府県会長
及び事務局長の皆様、さらには全国会の事務総長
を始め職員の皆様には、一方ならぬお力添えを賜
り誠にありがとうございました。皆様方の温かい
ご支援と多大なるご協力に対し、今一度、感謝を
申し上げ、会長退任にあたっての御礼のご挨拶と
させていただきます。

2年間どうもありがとうございました。